

これからの漢文教育

一九八二年三月二十一日(日) 午後二時より
茗溪会館 会議室に於て

出席者

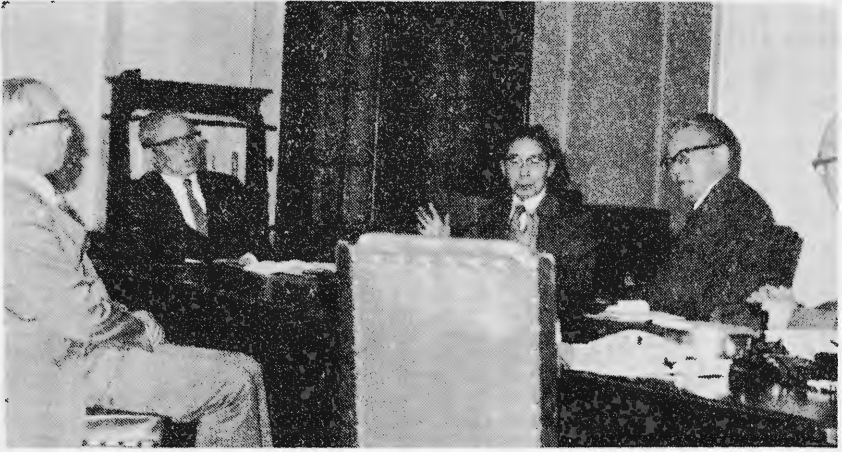
編集部

鎌田 正	伊藤 虎丸(司会)
月洞 謙	松村 英夫
大木 春基	記 録
加賀 栄治	松谷 格

はじめに

伊藤 大塚漢文学会で『中国文化』という会報を始めるに当たって何しろ会員の大部分が高校や中学にいるわけですから、大学の教師やその予備軍が論文をのせるためだけというような雑誌では面白くないというのが、加賀委員長はじめ我々の意志でありましたし、しかも、漢文教育をまともに取り上げている雑誌というところ、大修館の「漢文教室」くらいのもんですから、とにかく毎号「教育」を取り上げていきたいということを考えたわけです。取上げ

るに当たって、編集長として私は座談会というのが好きでして、これは編集がかなり大変だけれどもやってみようと思ひ、田部井文雄氏に相談しまして、最初は五十代の私達の年代が集まりまして若い人からは何言ってるかって言われるだろうし、先輩からは叱られるかもしれないが、まず問題提起をしよう、二年目は、昨年ですが、大体三十代から四十代初めぐらいの人達にやって頂いて、今回は三回目ということで、先輩方の御出ましを願って、一つ、まあ、お叱りを頂こうという趣旨でございます。前の二回の座談会記事の抜刷をお送り致しましたからご覧頂けたと存じます。今日は実は、都立の高校長をなさっておられる宮沢康造先生に御出席をお願いして現場を代表して司会役をして頂くというのが、松村君と田部井さんが考えて下さったプランだったんですが、誠に残念なことに御都合が悪いということで、やむなく私が役目柄一応舞台廻しの役だけさせて頂くことにしました。そこで最初に、編集委員の一人である松村君に昭和五七年度の教育課程の改訂によってどういふことになるかということについて、ごく大雑把な



報告をして頂き、その上で、前回の座談会にも出ておりましたような、生徒の側の問題、教員の側の問題を含めた現状の中で、今後、漢文教育は、どういう方向を模索していったらいいだろうか、というようなことについて、先生方の、御高説を承らせて頂きたいと

いうことでございます。では松村君の方からまず……。

課程改訂でどうなるか

松村 はい。それでは私の方から現場は、東京あたりで大体どうなっているかということをご報告したいと思います。標準単位は御存知のように四単位なんです、私らのところクラスの学校ですと大体増加単位にして、五単位にしてやるという形が多いと思います。——ただ東京でも職業課程では多分四単位で、国語Ⅰだけであるいは済ます所もあるんじゃないかと思うんですが、一般に普通課程の全日制では、五単位、一週五時間でやる。東京都の場合、大体持ち時間十八ですから、一人で、その五単位、五時間持ちますと、数がうまく合いませんので、現場で実際の扱いとしては、二、三と分けて現代文関係を持つ人と、古文、漢文を合せて古典関係を持つ人という風な組み合わせでやらないと、一寸具合が悪いんです。そこで、現実には私の所では、国語ⅠのAとか、国語ⅠのBとか分けて、Aの方は二単位として現代文関係だけ、Bの方は古文漢文合せて、古典関係だけという形でやって行く。担当はその学校の職員構成にも因ると思うんですけども、私の所の事例を申しますと、古典の方を、例えば四クラス持って現代文の方を二クラス持って十六ないし十八とか、そういう形でやることが多いかと思えます。そして、まあ大体の高校では国語Ⅰの上にさらに国語Ⅱを乗せて、三年生に就いて選択で、色々方向別にやるという形が一般ではないかと思えます。私の所で例に上げますと、「国語Ⅰ」五単位、「国語Ⅱ」五単位で、三年にいきまして「現代文」というのを三単位、それから古典の方は二時間

ずつ切りまして、二ないし六（古文一講座ないし二講座、漢文を一講座）という形でですね。そしてその他に「国語表現」、これは今、やるかやらないか未定です。どうも扱いくいという所もありますし、また好むと好まざるとにかかわらず、やっぱり共通一次とか受験というのがありますから……。最近の大学の入試では現代国語は大抵の所で出すんですね。ただ古文あるいは古典一乙は出さない私立の大学もございまして、現代文だけは三単位は全員履修という形にして、古文は好みによって、二ないし六の範囲で選択、という風な形を考えています。学校の実状によって多少違いがありますが、おおよそ、そんな風な方向が、ま、普通の高校の一般的なパターンじゃないかと思えます。

伊藤 五時間の中で漢文が一時間というわけですね。

松村 そうです。なぜ増加単位にしたかというと、標準の四単位では現代文、古典と分けると漢文が〇・七五、なんて形になりまして、うまくいきませんから、その点増加単位にすると、現代文関係二、古文二、漢文一というので割合に釣り合いがとれるし、やりやすいんじゃないかという、実施面での配慮が大分働いています。

鎌田 東京の高等学校では大体そういう線の方ですね。所が地方などに参りますとね、必ずしもそうはいかないという傾向の方ですね。

松村 そうだろうと思います。多分標準単位の四単位で一人の方が通して全部持つという。

鎌田 今伺った三年の、あなたの学校でね。古典は六単位まで

取るんですか。

松村 という風に：今までそうでしたから。

鎌田 今までそうだったの。これは随分取ってる方だな。もうそういう高等学校は、少ないでしょうねえ。

今度の改訂の問題点



鎌田氏

鎌田 地方の高校ではその古典などをね、選択で四とありますけれども、二、二、の形を取るかどうか。そういうよりも「著しく、甚だしく一方に偏らないようにする。」ということ……。

伊藤 あれは漢文というのは余りやらないで古文をやることをはっきり前提としているんですよ。実際はやってもいい訳だけでもね。「甚だしく一方に偏らない」ってことですね。あなたの学校のようにすればいいけれど、実際には今度の改訂でやっぱり漢文は非常に窮屈になるんじゃないかなあ。従来は選択は古文と漢文だけだったのが、今度は「現代文」も「国語表現」というのも、それに関わって来たとなると、この選択を、古典を選択する、況して漢文を選択するっていうのは、本当に狭められて来るという感じがしますね。「現代文」を三単位取って、さらに漢文も古文も取る、というのは、こりゃ少ないね。

松村 はい。ですから、私の所ですと漢文を取る生徒は主に女

子が多いんです。

鎌田 ほう、女子が多い。なるほど。そういうこと、あるかも知れんなあ。

松村 男子ですと理科系を選んで物理化学数学というのを取ってしまいうんですけれども。女子の場合には今の所はまだ理科系に進む者は少ないですから。結局は女子対策みたいな所も多少はあるんですね。あの、古典乙といひ……。

鎌田 まあ、貴方の話を伺って居る限りにおいては、今度の改訂でもですね、現場ではそれほど大きな影響がないという一つの安心感を得たわけなんだけれども、実際はこの改訂をそのままに実施するという学校も相当あるように、地方はね、聞いておるんです。そこがこれからの問題なんだと僕は思っています。必修は国語Iだけでしよう。大体、日本の高等学校の教育で、国語の必修を四単位にしたことは初めてだね。こんなこと未だ曾てないんです。もうとんでもない話ですね。従来の半分もないんだね。だから、それを、楯に取ってやる限りにおいて、地方あたりではことに職業課程はそうなるだろうな。国語は全体として非常に少なくなつて来るって感じがしますね。

松村 はい。そういうことですね。

鎌田 しかも、その四単位の中の古典は合わせて一・五、漢文〇・七五、古文〇・七五でしょう。そんな事でやって行けるかどうかという問題で、しかもそれは所謂、昔の国語甲、つまり総合国語なんですな。

松村 そうなんです。

鎌田 この総合国語ということが非常に問題なんで、これは大木さんも御存知だと思つたけども、あれは終戦後から昭和三十二、三年頃までは、国語甲ですね。これ、総合国語です。で、大木さんも僕も、その頃、その改訂に関係したんですけれど、結局あれでは、古文、特に漢文をやらない、という傾向が圧倒的に強かつたんですね。

それを現代国語と古典に改めた。そして今度またそれを元にもどしたんですね。それと、もう一つの問題は、その、国語甲と総合国語を、なるべく一人でやることが望ましいというのが文部省の考えですね。こんなことは到底出来ないです。僕は理想だと思つた。そりや高等学校の国語の先生は国語表現も、現代文も、古文も漢文も出来ることが望ましい。昔の高等学校は出来たんだ。所が今はそうじゃないんだ。今はもう非常に偏っている。だから、現代国語をやる先生方は、古典特に漢文というものをほとんど顧みないという現状があつて、一人で果して、それをやるかどうか。それを、やれなんていう、しかし実際は地方によるといふと、実は漢文など専門の先生がいらないんだ。

松村 いないですね。

鎌田 そこに問題があるんだな。だから非常にその内容の面でね、この総合国語にしたために、それを中心にやる学校には、もう大変な問題が起つて来る。ことに古典というものに大きな歪みが生じて来るような感じがするがねえ。まあ、古文より漢文はもっとひどいわけだな。そこに問題があるわけですよ。

伊藤 昨年の座談会をお読み頂いたと思つてすけども、問題

として出されたことの一つは、そういう漢文出身でない教員が、当然ながら圧倒的に多いわけで、その人たちが総合国語を一人で教えるということになると、実際の教室では漢文教材の部分は飛ばしてしまふ、というようなことさえも起り得るといふのですね。それで要するに、漢文専攻ではない教員でもやれるようにするにはどうしたらいいのか、「指導書」を含めて、もっと工夫がいるのではないかという議論が一つ出て居りましたですね。二番目に、たとえば前々号の雑誌に載った山梨の上田さんの実践報告のような扱ひ方は、これは正に漢文出身の教員じゃないと出来ないような、見事なものだけれども、一方ではとてもあんなことが出来る状況ではないという感じがあるということが三十代の若い後輩からは出ていましたですね。それで寧ろ自分は国語の中の、漢文の発見とでも言うか、国語科の中の漢文の扱ひ方をいろいろ追求しているという話があって、それを今後どういう風にやっていったらいいだろうかというような問題が出て来ていました。第三に、そのことにも絡むんですが、以前からの問題ですが、教材の所謂「精選」と言われる問題がやはり出て来ていました。第四に、私はこれが一番大事な問題だと思つたのですが、これは漢文出身の者を含めて教師の側の教材を扱ひ時の心構えと言ひか、姿勢あるいは観点というか、どういう扱ひ方、方法を取るにしても、本質的な意味で、生徒に退屈させる、生徒に馬鹿にされるような授業じゃ駄目なんで、漢文の場合、とくにその点で大きい課題があるというような問題。私はそんな四つ、五つの問題が出ていたように思つたのですが……。

「国語の中の漢文」というのは難かしい

鎌田 いや、今のね。例えば、現代国語を専門の先生の扱ひ易いような漢文、いうならば、その国語の中の漢文なんていうのはね。こりゃ僕話にならんと思うんです。というのは、それはもう既に経験したんです。あれは昭和三十四、五年頃の改訂で、つまり古典甲というものをやっただけですね。で、古典甲という発想は正にそういうことだった。それでやっただけです。なるべく国語と漢文を融合したものを作ってほしいということだった。僕はその時委員で、こりゃもう必ず駄目だ、こんな必ず崩れると言つただけど、実際にそうなった。それは難しいんですよ。

伊藤 そうかも知れませんか。

鎌田 非常に難しい。そんな風に扱える文章というのは少ないんですよ。だからそれをね、無理して捜したつて、部分的には一寸やれるかも知れませんがね。そんなに簡単なもんじゃない。従つて、私はやっぱり、国語の先生にもね、漢文をやつてほしい、いう感じなんです。ところが、私も教科書に関係して、今度出来た国語Ⅰ、Ⅱ用の教科書を相当見ますけれども、実際に松村君難しいね。

松村 そうです。

鎌田 あれは一寸いけないと思うんです。あれでは、ますます「漢文離れ」が起つてくる。今話に出たような、現代文専門の先生にとってはなおさらだね。以前だったら高等学校の二年三年でやつたような、そういう教材、例えば「漢楚の興亡」なんてものを最初に持つて来る。こんな扱ひは、やっぱり無茶です。これで

は自ら漢文を駄目にしてしまう。そういう傾向が強いね。全部がそうとは言えないけども。

伊藤 今の鎌田先生が出してくださった問題あたりで、月洞先生、何か……。

『唐詩選』『十八史略』『古文真宝』

月洞 あのねえ、私は、今の先生方ね、学問の方は熱心だけれども、教育の方を忘れてる感じがあるんですね。というのね。僕等の学生の頃は中学の時に『十八史略』



月洞氏

『十八史略』、高等師範に入ってから『古文真宝』、『唐詩選』、『三体詩』をやったわけで、要するに富山房の漢文大系の第何巻かね、皆一緒になった、ああいうものをやった、史書は別としてね。所がね、この頃の人達は、『史記』だとかね、それから唐詩といっても『唐詩選』なんてくだらんという風な発想で学習されてるし、教える方もそういうものをやるんだね。大学でも例えば、『史記』とかをね。私など『史記』は全部読んでいません。『十八史略』は全部読みましたよね。例えば、『唐詩選』なんていうのは、馬鹿にしてるけども、実は、例えば、「白頭翁に代りて」「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同」、あれは『唐詩選』ですよ。所が『和漢朗詠集』じゃ、あれは劉延芝じゃないですね。宋之間になつて。ところが、『全唐詩』を見ますとね。あれは、

賈曾という人ですよ。原型はね。そうすると、我々は『唐詩選』によっているわけですよ。唐詩が何だのかんだの言っているけれど本当は『唐詩選』に拠っているわけ。『十八史略』なんてものも、安岡正篤さんなどは非常に大事な本だと言って推薦している、日本の実業家なんぞそれで全部勉強しているんだけれども、これも『史記』はいいけれども『十八史略』は浅はかだという風に考えて、教育でもあんまりやらない。陶淵明の場合はいちいち議論にも出て来るけれども、これも日本人はほとんど『古文真宝』の陶淵明と『桃花源記』、そういうもの以外は恐らく親しんでもいないし、読まれてもいないと思う。だからそういう事から言うとな。大学の授業でも、国語の教員になる様な人は、そんな『史記』だとかなんか難しいと言うか、そういうものばかりやらないでその『古文真宝』、『十八史略』、『唐詩選』という我々が高等師範でやったような、或いは中学校でやったようなラインをやるのが日本人として一番いいんじゃないかという気がするわけです。何も難しい所狙って学問的だとか、何とかいうことを考える必要ないと思う。

鎌田 いや、大学の方がそういうような傾向なんだなあ。ああいうものを、比較的軽視してね。まあ、ある意味においては非常に内容的に高いと思うんだけど、それが高等学校の教科書に反映しておいて、それが出ている。従って、ああいう教材は相当の学殖がなければ、本当は教えること出来ない。それがないと、国語出身の先生には漢文が持たないという、理屈になっているわけですね。そうでなく、やっぱり昔から『論語』にしても、『十

八史略」にしても、詩にしても何て言うか、昔から日本人に親しまれて来たものね。そういうものから入って行けばいいんだけど、所が、今度の教科書なんか見ると確かに一年の入門編の段階ですぐ「漢楚の興亡」です。そういうのがあるんです。とんでもない話です。

月洞 「漢楚の興亡」が良くて『十八史略』は悪いってことないと思うんだ。非常に先生方が学問的になってる面がある。

この前の座談会記事を見て僕は感じただけだけど。例えばねえ、「蕭蕭として班馬鳴く」というのをあれは「いななく」と読ませると言うことを言ってますね。だから僕「いななく」と読めるのを国語の辞書で引いてみたら、「元気になくこと。」とあるんだよな。「蕭蕭として班馬鳴く」というのは、韻の都合もあるかも知れないけれども、あれは、『詩経』に載っていて、これは僕専門だから知ってるんだけど「蕭蕭として馬鳴く。」と、「鳴く」というのは、「譁譁ならざるなり。」、静かに鳴いてるんだというところが、ちゃんと書いてあるわけです。で「蕭蕭として班馬鳴く」の「鳴く」というのは、ひびーんと高く「いなないた」んじゃないという風に、(笑)とらないといけないと思う。

鎌田 私も賛成だな。あれを誰かの教科書では「いななく」と読んでいたんですけど、僕は今教える時は「鳴く」ですよ。

月洞 そうして見たらねえ、『中国詩人選集』も「いななく」って読んでるんだねえ。

鎌田 そうかね。それは、僕は行き過ぎだと思うね。(笑)
月洞 そういのが、一般の傾向になって来たんだけど、

しかしねえ、やっぱり昔の人の古訓を、「古訓これ則る」と『詩経』にあるけれど、そういうかなきゃいけない。

伊藤 奈良・平安以来の日本人の「訓」も含めていうなら、国語を生かすということにもなりますね。

月洞 「古訓これ則り」でね。ええ、我々、昔の偉い人よりも以上には出られないと思うんですよ。

国語と漢文との連携を強めよ

加賀 もっとそのねえ、国語、古文の方で扱う者と、漢文の方



加賀氏

でやる人との提携が必要でないだろうか。たとえば今の「古訓に則る」というでしょう。要するにこれ、日本の大和の言葉ですわな。

所がね、そういうものに対する確かな把握というのがね、やっぱり古文の授業で

的確にやってもらいたいと思うんですね。たとえば、「何々すべし」の「べし」というのを、大学で彼等なり彼女等なりにやらせますとねえ、これが終止形に付かないんですよ(笑)。連体形に付いちゃう。何形に付くという「文法」の知識の暗記じゃなくて、耳でもってそういうものを自分でちゃんと把握させなきゃいけない。こりゃ何て言ったらって国語の古文の読み方と漢文の訓読との常に緊密な連絡が必要だって一つあると思う。そういうことは声を出して読ませると初めて判るんです。だから私は必

ず声を立てて読ませますけれどもね。それと同時に今度は逆の面から言つて国語の中の非常に良い言葉、美しい言葉というものを自覚的にとらえさせることが出来る。漢文で漢語が出て来た時には、すぐ漢語で置きかえないで大和の言葉では一体的確にどう言つていたかというのをね、逆に把握させたい。それによつて寧ろ国語をはつきりさせる、同時に漢文、漢語をはつきりするという風な相互の連携というものがもつとなされなきゃいけない。だから、漢文は漢文の専門家だけで、国語は国語の専門家だけというふうなことにやなくてね。漢文漢語の力なくして国語の力も出て来ない、国語の力を發揮しようと思えば、どうしても漢語漢文の力が必要だつて言うことをねえ、実感させたい、ということだなあ。

だから、段々話が細かくなって行くけれど、私は日本語の特質も、日本文化の特質もそうだと思ふんだけど、漢語、中国語では表わせないものを、大和の言葉ではもつと微妙な所までも出しているものが沢山あると思ふんですよ。だからそれをね、例えば「曉」ギョウ「ウ」という漢字がありますね。それと「曙」シヨ「シヨ」という漢字がありますね。古来日本では「シヨ」に対して「あけぼの」と読み、「ギョウ」に対しては「あかつき」と言う。所が中国では一体それを区別してるのかどうか、というふうなこともあるしね。私は日本人はずうっと、もつとこの微細な時間の推移に関する言葉を作つて来たんじゃないかと思ふんですけどもねえ。だから、そういう時には逆に、例えば「曉」という字を取り扱うなら、「曉」と曉を使った熟語が色々ありますけどもね。それ

を取り上げながら、日本人の季節の推移、時間の推移に対する微細な感覚的なものに「こんな言葉もあるよ」とかいうようなことで、注意させることもやり、逆に今度はそれが漢語ではどう言つてるかというこゝによつて、漢語と大和言葉を結び付けるというふうな、そういう相互の連携ということも、もつとやりたいということが一つあります。

声を出して読む事の大事さ

それで、まあ、基本的に言つてねえ。こりゃ指導の問題になるけれどもねえ。音声を通して把握させるということ、これはもう小学校からそうだと思うけれど、絶対に必要だと思ふんですがね。それが黙読だとか何とかだと言つてね。耳に入れて、耳で把握させることが、どうも足りない。だから、私は漢文の訓読をやる場合、大学生であつても必ず声高らかに、高らかにしゃなくてもいいから、必ず、声立てて読ませることをしてしまふ。だから今度逆に書き下し文を書かせた時にはつきり出るので、さっきの「べし」が連体形につくなんてのも——それは耳から覚えさせないからだと思ふんですよ。

伊藤 大木先生その辺を高校と大学と両方御覧になつていかがですか。

「鑑賞」ということ

大木 いま伺つてですねえ、特に最後の加賀さんの、言葉の結び付きと言うか、和語と漢語と、そういうものを絶えず関連付けながら指導していく、これは非常に大事な事柄ですね。で、結局その一点から考えた場合に、現在の漢文教育において一つの、改

革、改善の糸口があるとすれば、僕は広い意味での鑑賞という立場だと思っただけです。

伊藤 解釈と鑑賞という時の鑑賞ですね。
大木 そうです。鑑賞の方向をみざすという提言には、これま



大木氏

た異論も出るかと思いますが、漢文の教育と言うか、学習は一つの文学教育であるという立場が考えられるわけですね。先程から話題になっている国語専攻の方々、したがって漢文のほうの専門的学力はそれなりに、非常な専門的学力があるならば、非常にやりやすいし、成果もあげやすいと思うのです。これは現にそれを裏書する一つのケースですが、例の「長恨歌」の指導をです、寧ろ国文専攻の教師の指導の方が、実際の生徒の受ける影響が強いということですね。漢文専攻の人は、何と云うか余りにも従来からの枠組みの中に身を縛り、漢文という専門的立場だけにすがって指導して行く、そうすると、かえって生徒から離れてしまう。作品の本質と言うものを指導し得ないし、いきおい作品のほんとうの面白さに触れさせ得ない……。端的に言ってしまうと、そこですらに言うならば、結局漢文指導だけを、どうこう考えるんじゃないかと、せめて国語教育、日本の国語教育に於ける古典の指導をいかにするかって言

う視点なり立場なりから考えなおしてほしい。古文と漢文との間の問題も勿論ありますけど、とにかく古典という立場に立って、日本の古典教育をどうするか、そして、現場の生徒達が本当に、この古典というものを、なるほど古典とはこれなんだなあ、と感じ、そしてまた先生も、漢文専攻の人だけでなく全て共々に、古典の味わいについても汲み取って、古典というものは、必要なものであり、学習しなげやならないものだという、そういうことを身に感じて会得し体得させることが、今一番必要じゃないかしらと思っただけです。そしてこの事は、国文古典の指導でもまったく同じことなんですよ。

伊藤 そうなんです。まさにそうなんです。
大木 笑い話のような事実談ですが、高校の古文の指導で、一時間かかって、たった四行しかやらなかったと言う。何をやるかと言うと、いわゆる読解専門です。そのため文法指導一点張りです。その教材の本質には何ら触れることなしに通ってしまう。これでは残念ながら昔の「曰若稽古三万言」と擲揄された訓詁主義へのそしりは、あなたが中国上代だけのものではないことになってしまいますよ。この点国語教育の方では非常に考えられているんですが、漢文の方では実践の上で果たして国語並みに行っているかどうか問題ですね。

伊藤 ご指摘の点は、まさに先程私が去年の座談会で出た問題の中で、一番大事な問題だと感じた点と申した点なのですが、その場合去年の話の中では極めて具体的な問題として指導書という問題が一つ出て居りましたですね。漢文の指導書はよくない。先

程からの漢文専攻、漢文出身でない教員が、先生の仰言るような扱いにせよ、扱っていけないような良い指導書がほしいというような……。

国語教育は古文に徹底せよ

加賀 私は高校の国語教育については、素人と言うか、何も解らないけれども、現代の国語教育というのは、前からそう思っているけどねえ、もともと古文に徹底して行くべきだったくらいに思うんですよ、実は。つまり現代国語なんというものを立てるやり方をしたこと自体が非常に間違っているというくらいにまで思っている。というのね、古典と言うか、古文をさちちとやって初めて、日本の古典文化が判るばかりでなくて、やはり現代の言葉も本当に判るのだから、古典教育なり、古文の教育なりというものをうんと習わした方がいいと思うんだ。その場合に、今大木先生が仰言ったようにね、たった三行か四行の所を、根掘り葉掘り文法の関係がどうこうなことをやるんじゃないでなくて、一番効果があるのは、やはり音から来る、音全体、音読をしてその調子から来るもの一つ、まず一番基底に置いて把握させなければいけない。私はね、そうすれば必ず、漢文と嫌でも応でも交流せざるを得なくなってくると思うんですよ。

鎌田 いや、加賀さんの話聞いているとね、やや僕の主張と共通するんだけどね。と言うのは、僕はずっと前から国語教育は「読みに入って読みに終わる」って言っているんですよ。「読みに入る」ということはねえ。内容の理解とか、読みは、最初から完全なものじゃないですよ。それから入って苦労して、段々にいっ

て本当に理解が出来て正確な読みをするようになる。「読みに終わる」。いうならば最後には朗読することですが、ところがこの朗読って言うのは、指導要領では、この前の改訂から初めて小・中・高一貫して朗読をすべきだという一項が加わった。これは非常に大事なことです。それは加賀さんの仰言るとおりだ。

学生よりも教師の学力が問題

それからついでに貴方の話と同じようなことをいうのだけれども、漢文の先生は訓読、高等学校は訓読だから、普通は訓読でやるのだから、その限りにおいては、やっぱり古典文法は正確に把握してなきゃ駄目ですよ。ところがこれがまったく今の高等学校は体系的な文法を教えてないんだなあ。だから文法の知識がない。大学生、教育大に於ても、本当に文法的な知識がないですよ。従って読み方が口語とちゃんぼんですね。仮名使いはもちろんそうだけれども、出鱈目ですよ。やっぱりその辺はきちんとやらないとね。しかし先生自体もそうなんだよこの頃は。漢文の先生も、実にね、高等学校の先生方も大変なものです。全てとは言わんけれども、文法について、全く驚くほど知識ないんだな。従ってその漢文の読み方も出鱈目ですよ。それからもう一つは、語法と言うかね、漢語の構造といったこと、漢文的な文法の知識に基づくと読み方ですね、それが正確でないから、全く得手勝手に大意を取って読んでいますよ。これが横行して来ると、そういう文章の読み方で鑑賞されては困ると思うんですよ。

月洞 どうもなんだねえ、生徒の落ちこぼれをわあわあ言っ

るけど、先生の落ちこぼれの方が問題だね。

鎌田 僕は落ちこぼれは生徒より先生の方にあると思う。

伊藤 段々耳が痛くなつて来ましたが(笑)、それは私達の年代から既に始まっていますよ。私達が中学校で漢文を五年間やった、「英教国漢」と言った時代の大体終わりの頃ですけれど……。ですからそういうことは大学教育の問題にもなつて来るんじゃないでしょうか。お話のようなことを、大学でどう教えたいのか、いつも悩んでいます。自分が何も知らないのに、学生はもつと知らないわけですから。結局、作品の「鑑賞」とは別に漢文訓読入門みたいなことをやるしか方法が思い当たらない……。

加賀 あのね、漢文入門なんていう題目にしないで概論でいいんですよ。だけど実際には、それやらなきや駄目だ。実際にそういう基礎的なこと、——たとえば返り点、送り仮名を付けさせるとか、或いは白文を書き下すとか、そういうこと実際にやってみて判る。身に付いて、自分が足りないことが判るんですよ。伊藤 それをやるのが実は鑑賞をすることでもあるというようにしなければいけないことも承知はしているんですけども、その結び付け方が、教師として一番難しい所なんですよ。

鑑賞・読解の関係

大木 読解と鑑賞ですが、普通常識的には、やっぱり一字一句厳密に正確に読解して、然る後の鑑賞と、こういう考え方が常識ですよ。所が実際の指導方法の問題からするとですね、読解と鑑賞とを時間的な先後関係に位置づけるのではなくして、あくまでも作品の鑑賞を主眼に据えての、最初から鑑賞そのものを目ざ

しての指導ということに考えたいわけですよ。最初から、作品の性質を味わい読むこと、それを目当てにしながらの指導というわけですね。それは、単なる読解とは目的のちがうものである。いかにして作品に感動させうるか、いかにして作品の価値に触れさせるかを終始目ざしての指導になりましょう。したがって、具体的には、最初から一字一句の分析的な読みに入るものとは発想の違いがあります。早い話が、あの杜甫の「月夜」、「今夜鄜州の月、閨中只独り看るらん」の一首でも、これを十分に読んでみると、結局第三、四句のいわゆる流れ句の「遙かに憐む云々」がほんとうに味わい読めていれば、この一首のおもしろさというか、妙味もわかったことになるでしょう。「憐む」の一語を鑑賞の切込みにしてここを考えさせてみると、なるほど読解的には「小兒女はまだ長安にある父のことなどは考え及ぶまい。それが遠く都の空から憐れに思われる。」となる。しかし、「憐む」の心情をとりあげて考えさせてゆくと、それは、子供たちのふびんさ、とか、いとおしさという正面切つての意味にとどまらないで、実はむしろ、間接的に、妻の心情をこそ憐れんでいるということになってくる。それというのも、八句全体がすべて妻を中心の描写であり「閨中只独り見るらん」の「独り」と言い、最後の「双び照らされて……」と言い、どうもさききの第三、四句も、妻へのふびんさを味わい読めてくるのです。読解訓読では掘りさげえない扱いだと思うのですが……。

加賀 その「憐む」をね、例えば、「いじらしく」とか、「いとけなさ」とか「可愛らしさよ」とか、そういうふうに行くんだだけ

ども、そういうふうに行くにねえ、あの「憐む」という言葉のただの置き代えじゃ絶対出て来ない。それは先生仰言ったように、朗読しての、鑑賞に行くんですけどもね、私まだ、その時に、その「憐」はね、君等使ってる熟語で、どういう熟語があるかと、こうやる訳ですよ。そうすると「憐憫」と言う時の「憐」とか、「可憐」と言う時の「憐」とか、とにかく出来るだけ、その知ってるものを言わせる。つまり日常使っている漢語がマスターされているか、いないかをその時点でどんどん出させる訳です。そうすると、その「憐」の持つ意味も、自分の使ってる漢語と合せて把握するんです。だから、さっき言ったようにね、訓と音と漢語の造語のあれと、皆一緒にして相互に連絡させて行こうというわけです。

古典教育全体の危機

加賀 話をまた元へ戻しますが、今度の国語Iの教科書は古文も漢文もみんな入ってるわけだ？

鎌田 一冊で現代文、古文、漢文みんな入ってる。

加賀 それで、その中で漢文は年間を通じて、さっきの六ないしは八単元、いやもう少し行きますね。

松村 いや、三単元ぐらいしかありません。

鎌田 そう、三つあるのはいい方だ。

加賀 いやそれは、また寥々たる……。

鎌田 だって〇・七五だもの。だから、私は限界があるっていうんだ教育には。あの程度やったんでは、仮にやったって断続的にやるんで、効果がない。

加賀 いやあ、全くそうだ。

鎌田 ひどいもんですよ。だから東京都あたりではね、そんなの駄目だから、つまり増加単位を一単位とって、漢文を少なくとも全体で一単位ぐらいやる。そうせざるを得ないんだね。やる限りに於ては〇・七五なんて。古文も同じですよ。古文もね。私は毎回言ってるんですが、漢文が非常に逆境におもいった時、古文の連中は対岸の火って笑ってました。僕は言っちゃったんだ「あなた方ね、漢文も、これ日本の古典だ、漢文ばかり冷笑しているけれど、やがてあなた方も同じ運命になる」とね。あの連中は全然そういう意識持たなかった。ところが、今度まったく同じ扱いです。古文も〇・七五ですよ。そうですね。

松村 そうです。

鎌田 古文の連中も慌てているんだけど、しかし古文の国語の先生たちは、何かその、古文というのは日本の古典なんだからって、非常に楽観しているところがあるんですね。危機感はない。教育課程は変っても、どうせやりますからって言うんだけれど、しかし制度として決められると言うのはやはり大きな問題、非常に大きな問題なんだ。

加賀 職業課程ではもう国語Iだけだね。

鎌田 いや、そりゃ判らんけども、あるいはそうなるかも知れないな。

松村 Iだけ、そのIもですね、ま、極端なこと言うと、一年でやらないで、二年間に跨がらせてやるということも、当然出て来る訳です。私等のところみたいに、五時間取ればいいんで



松村氏

すけども、職業課程と言うのは、そんなに取れませんが。そうすると一つの方法として四單元、四時間一年と二年に跨がらせてやるということになる。もっと言えば国語はコマギレにされてしまう……。

故事成語の「百人一首」と教材問題

伊藤 月洞先生、先ほど何か……。

月洞 いや、僕が言いかけたのはね、僕は古典を教える時は百人一首を使っただよ。これは直ぐ覚えるようなのでね。漢文でもそれが出来ないかってことを考えたんですがね。例えば「あの時は「朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり。」と。『い』の時は「殷鑑遠からず」と言う風に、いろは歌留多式にそれを漢文の故事熟語と言うか、そういう文章でね。そうすると漢文の口調も語法も慣れ易いからいいんじゃないかと、昔考えて計画したことがあるんだけどね。やりませんか。

鎌田 そりゃ面白い。ただね、これ、教科書についての文部省の方針が、一寸気になるんですよ。と言うのはね、漢文なら漢文の教科書はそのうち六割は『論語』とか『唐詩選』とか、とにかく三つの古典で占められていなければならないという限定があるんです。昔のように何でも採れるわけではないんです。つまりある古典をまとめてやれっていう方針なんだな。だけど〇・七五ぐら

いで何が出来るんですかね。ひどいですよ今の検定というのは。教材は昔より非常に狭められましたなあ。だから諸子などに及ぶ余裕なんてないんです。

松村 例えば唐詩だと、『唐詩選』で全部採っていいわけです。『唐詩三百首』からも持って来た、『全唐詩』からも持って来たという、駄目なんです。

「感動」を伝える教育

大木 僕は、その漢文的な知識とか、そういう卑近な常識を注入する一つの手段としては、今のお話の、漢文「百人一首」も結構だし、生活的にも必要なことだと思っんですが、唯、もっと根本的には、本当にこれからの未来を担って立つ若者達に、漢文というものは、やっぱりかけがえのない、りっぱな価値を備えた古典なんだということを、おのずから染み込ませるような指導、言うならば、古典独自の感動体験を味わわせること、これこそが漢文教育としても、取り組まなければならない基本的な課題だろうと思うんですよ。

鎌田 大木さんね、僕は賛成だ。それは、ひとり漢文のみならず、国語教育全体がそうなんです。ところが、国語教育、現代国語を見ますと、そういう教材、所謂文学作品が漢文には比較的多いんだけど、そういうものなるべく排除して、論理的なものとか、所謂論説的なものとか、そういうものを尊ぶ傾向があるんですね。だから生徒は全然感動しない。だからちよっと投げます。況してやね、ここの付属の高校あたりでは、現代国語なんて勉強しませんよ。積んどくだけです。あんなのさっさと判れば

いって言うんです。今の生徒はそういう傾向ですね。やっぱり負担がかかるのは現国じゃなくて古典だと、まだね。まだ古典だと思つてます。僕等は古い昔の教育を受けたからかも知れませんが、これも、国語教育に於ては、やっぱり感動、清らかな感動ですね、これが大事であつて、伊藤君なんかには反発を買うかも知れませんが、それはやっぱり大事じゃないかと思ふんです。そういうもの、あの高校時代に、あの中学で習つたあの教材でいうもの、本当に心に染み込んでおつて、一生忘れられないんだ。

大木 漢文教育の現状では、とかく入口までは生徒を連れてゆきながら、いわゆる訓詁とまりで、肝心の奥の院ならではの雰囲気には触れさせない。だからもう、あんなものは……と、背を向けられてしまふ。

伊藤 教師が一番問われる問題ですね。大木先生の仰言るような事の第一前提は、まず教師自身が面白がる、感動するということなのでしようが、それが結局をここまで行けないと、とかく、基本語法とか受験用の所だけは教えるよ、という格好になつて行く。そこらが一番、どうしたらいいんだらうかなつていつも思うことですね。

教材の問題——生徒との落差——

それから、そうなる原因の一つとして、学生なり生徒なりの生活言語と漢文や古文とのギャップが非常に大きくなつていふことがありますね。この間聞いた話ですが、夏目漱石の現代語訳というのが出てるんだそうですね。

松村 確かに現場でも樋口一葉の『にぎりえ』、『たけくらべ』

なんか読んでも、先生方とは違つて、生徒にはもうまるっきり古典なんですよ。古文の場合もそういうこと言えるんですが、例えば『徒然草』で言うのは必ず出て来るわけですね。文法や語法の教材として非常に適当だから出て来るんですけれども、あれ内容思想上から言つたら非常に難しいんじゃないか……。

鎌田 ああ、難しい。

松村 漢文の教材の場合にも表現的には難しくなくても、内容の扱い方では非常に難しいつてものが平気で教科書に採られてるんですね。実際、教材精選なんて言うんですけど、そこを考えたといふと、大木先生の仰言つた鑑賞と言つても、内容的に非常に難しく、ある程度、専門にやつた人でないと扱えないような教材がぼんぼん出て来るんですね。

加賀 深く掘りませようとすると、どうしても、そうなる。『徒然草』の場合、老荘には必ずぶつかるしね。

大木 今お話しした『徒然草』の場合でもですね。例の「神無月のころ、栗栖野という所を過ぎて……」の段で、はるかな苔の細道を踏みわけての庵住まいを見いだし、すっかり感じ入つたのも束の間、庭先の枝もたわわになつた大きな柑子の木が、嚴重にまわりを囲つてあるのを見て、「この木なからましかばと覚えしか」と最後が結ばれていますね。この一ことは、誰が読んでもこの一段のポイントになるところであるし、何度も読ませれば、おそらく生徒もそれに気づくでしょう。しかも、「この木がなかつたならばと思われた」というだけで、それ以上何も説明していません。随筆文学特有のおもしろさでもあるわけでしょうが、この

おもしろさの箇所に着目させ、ここをバネにして、全文を構造的に追ってゆく。形の上では同じ一語一句の扱いのようでも、それはいわゆる孤立した語釈、読解ではなしに、絶えず主題とのかかわりのもとに、全文の表現を味わい、読んでゆくというわけです。表現を味わい読むということこそ、ことばの眞の学習がありますし、それだけに指導者の教材研究も大変なわけです。作品を支えている一語一句の、生きた意味を読みとらせるようにするのですから……。それなのに、ただ単なる順を追っての平板な逐語訳や、文法習得のためのような古文学習に陥っては、まことに無味乾燥、生徒からそっぽを向かれるのも当然ではないですか。実は漢文古典の場合も、まったく同じだと思います。まあ一つの例として、「漁父辞」なら「漁父辞」で考えてみますと、あれは、ご承知のように漁父と屈原との登場によって、きわめて対比的な、人の生き方、処世観が語られており、そして一番最後を「漁父莞爾として笑ひ、櫂を鼓して去る……。」と、「滄浪の歌」を添えて結ばれていますね。あの笑いですよねえ、一体これはどういう笑いなんだろうと、おそらく誰でも、惹かれるというか、引っかかるものがあるに違いない。これが一種の文学的なおもしろさである。それで、これを一つの学習課題として、その解決に学習をすべて集中させてゆく。ですから読解して然る後に鑑賞するというような、ばらばらな、乃至は過程的なものではなくして、作品の鑑賞即学習として展開させてゆく。いきおい漫然たる逐語訳というようなことは排し、全体とのかかわりにおいて一語一句を鋭く読みとらえなければならぬことになるし、そこに学習のおも

しろさも期待されることになるでしょう。

伊藤　でしようねえ。だと思えますねえ。そのためには、やはり教師自身が面白くないと駄目なんですわ。

加賀　一番いいのは、教師が、自分が感動を持っていれば、必ずそれが触れる。それなしにやられたら、本当に教えられる方も何だと思わし……。

大木　嫌になっちゃいますよ。「そんなことはあんちよ、ご見れば判っちゃう」というわけで、教師の効用が、あんちよ同然では困りますね。亡くなった文法学の時枝誠記氏は、古典のもつ思想感情に触れさせて、そこから人間形成に資するものを汲みとらせることを「惚れさせる教育」と呼んでいたが、——そのためには、指導者自身が先ず惚れなければならぬわけでしょうが。

松村　ただ、現場としては三人とか四人の教員が学年八クラス持ちますと、ある程度進度を合わせなければならぬ。自分だけが例えば「漁父辞」に三時間四時間かけて鑑賞するというわけにはいかない。それから共通一次とか入試って言うのが、やっぱり念頭にありますから、ある程度の量も読ませなきゃならない。しかも現実には漢文に割ける時間は少ない。その辺に私なんかのジレシマがあるんで……。

大木　おっしゃられた懸念はわかります。現実的に入試という問題の一つ考えてみても、それに適応させようと思えば、予備校式の指導に徹すればよい。そして程度の差こそあれ、そのような学習指導がむしろ現実なのではないかしら。事実一番やりやすい形です。訓詁主義でゆくのが、一番安易な指導ですよ。それに時

折り必要でもないような専門風を吹かせてみたりして……。残念ながら、これでは漢文のイメージチェンジは、百年河清を俟つようなものでしょう。第二に、いわゆる漢文の読解力の養成に關してですが、これはむしろ考えようによっては、かえってほんとうの読解力がつくのではないのでしょうか。さきの「漁父の辭」にしても、当然あの作品を構造的にとらえるとともに、二人の登場人物の問答体的手法をとおして、漁父の笑いを読みとろうというわけですから、相当な読解力が養われることになりました。味わい読むというか、感動を求めて文学的に読むためには、思考も感覚も総動員されねばなりません。予備校では求められないことでしょう。

伊藤 だから、さっきのお話のように、国語の人が教えた「長恨歌」の方が却って生徒には感動を与えたとか……。

大木 教材を一つの文学作品として、文学的に捉えますからね。感動の中心と言うのはどこを押さなければいってことが、先決の問題となります。それをいわゆる読解訓詁で行くとねえ、中心が据えられていないから、必要のないことにまで横広がりするんですよ。『曰若稽古三万言』の現役版に類しかねない。特に高校は、専門教育でもないのに、得々と専門的な知識を広げちゃって。で、結局一つの作品の本質的価値には迫れない。何のための教材かわからないという結果を招いてしまう。

今次改訂の最大の問題点―国語軽視―

鎌田 僕は今度の改訂で、やっぱりいちばん問題なのは、この文部省の指導要領に決められた線と言うのは、何と言っても国語

というものを他の教科と同じように考えて国語軽視の線を取っておると言うことだと思っんですよ。昔は他の教科よりも特に国語というものを尊重していた。所が今やそうじゃない。僕は教育審議会の過程をいろいろ聞いているんだけどね、そういう事を盛んに主張した人もあった。せめて、必修を二年生までやってほしいということを盛んに主張したそうですね。所がそれが全然受け付けられなかった。理科とかね、他の教科と何の区別があるかね。そういう具合に区別がないという立場で押し切ったんですね。これは私は根本的に間違いだと思う。で、今度の教育課程というのは、取り敢えずそういうことで一応は決まったんですけど、大体課程というのは十年続くんです、十年間十年間で変わるのです。もっと早く改訂になるかも知れません。で、私が心配することは、国語教育というものは非常に大事なもののだから今度の改訂にもかかわらず、国語を尊重する姿勢を取って高等学校でやってほしいということ。中でも、古典教育の漢文というものを、これも大いに尊重して、増加単位でやってほしい。そうでないと、次の改訂でね、やっぱり現場はこうなんだからと、もっともっと狭められるかも知れない。どうしても今松村君のお話のように、現場に於ては、国語教育の尊重と言う立場で増加単位を取ってやってほしいということですね。それが一番大事じゃないかと、そう感じています。

加賀 小学校はまだそうじゃない。

鎌田 いや小、中がそうなんだよ、何しろ、高校、中学だって今度一時間減らされる。

松村 だけど英語も減らされてるんです。

鎌田 英語は減らしても、結局、実際にはやるって言ってるんだ。これはあれは選択なんだが、選択だつて構わない、我々はやるんだと、実際には、やるというんだ。ところが古典になると、その選択一単位として、やらない。時間を少なくして。そこが非常に違うところだな。

松村 現実には私の所などでも、ここ二、三年、漢文の選択が減つて来ているんです。何故かというのと、私立の大学の大多数が、国語の試験は現代国語のみ、あるいは古典I乙でも、漢文は含まないと、はっきり明記してあるわけですね。そうすると……。

伊藤 私は前の座談会では「文化の基礎」なんていうキザな言葉を使いましたけれども、本当に何か、国語がすべての教育の基礎のはずなので、それはむしろ他の教科の先生方がそれを強調なさるんですね。国語力が弱いと。

鎌田 そう言っているんだね。国語があらゆる教科の学習の基礎だと言われているんだけれども、今度はそういう立場は取られないのですね。

松村 英語の先生から時々聞かれるんですが、年々和文英訳が下手になる、と言うのは日本語がもう一つ判らないからなくて、要するに自分なりのわかり易い日本語に置き代えるという力が、なくなつて来たためだというんですね。それから、数学の先生からも「こういう問題出したら、生徒がこちらの意図を読み違えてこういう風を取ったけどもどうだろうか」と二、三度聞かれたことがあるんです。数学の設問なんか、せいぜいまあ二行か三行、

それでも読み間違えるという生徒が結構増えて来ている。そこでまたそういう風に日本語の判らない生徒がいるんだから、判る様にしてくれと言う要求が、ある一方から出て来るから、多様化とか何とかと言う形で何か……。今度の教科書全般を見ても、何かこう、トーンとして下げるような方向にしか働いてないような感じを非常に受けるんですね。

古典Ⅱ 国語教育全体の危機

鎌田 さっき言った国語の能力の問題ですけど、これは加賀さんもお話したけれども、私も現代文だけやっていては国語の能力というものは本当は養われないんじゃないか、やっぱり古典という相抵抗のあるものを高校あたりの段階で、じっくりと学習させる、そういうことを経て初めて国語の能力というものは出ていくんじゃないかってな、そういう意味で高等学校の段階では、現代文よりも寧ろ古典に力を注いだ方がいいんじゃないかというような感じを持っています。率直に言えばそうなんです。

松村 僕も現代文だけやってれば文章書く力が付くという風には考えていないんですけども、ややもするとそちらの方へ行く傾向が強いですね。

鎌田 現代文をやっているとね、その抵抗がないから、軽々々習するんだ。本当そうだと思うんですよ。現代文をじっくり味わうと言うことをやらない。入学試験だつて僕も驚くんですよ。現代文ね。今年は非常に長い文章で相当難しいんだよ。所が出来るんですね。もう、さっと読んで、解答に重点置くんだけ。今はそうなる。解答を見てこれは正解と判る。さっと読んでさっさと

そういうらしいですよ。文をじっくり読むなんてしないらしい。実際あれだけの長い文章だったら読むだけで一時間かかってしまう。それを、一寸の時間でやるんだから、そりゃ解答だけ見ていますよ。で、現代文ってそういう面があるんです。今ほとんど選択肢になっているでしょう。その解答例だけ見ればもう正解は判かる、問題文を読まなくても試験は出来るって言うんですよ。こんな教育をやって居ってはね、国語の能力は出来ないと思わぬですよ。こりゃもう漢文とか古文とかいう問題をじゃあない、国語全体に係わる問題ですね。本当はそうなんです。今や国語全体として国語教育はどうあるべきかということを考えて行かなくちゃ駄目だ。その中における古典教育、それを真剣に考えて行かなかつたら、このままでは私は古典教育というものは滅びるとは言わんけども、段々と衰えて行きますね。衰えて行きますよ。

早稲田大学の入試問題

伊藤 入試問題ということで言うと、今年私の所は、漢文と古文と現代文の融合問題を出しまして、良寛の漢詩と唐木順三の文章の組合せで、悪い問題ではなかったと思いますよ。

大木 早稲田でね、同じく融合の問題でいいのが出ているんですよ。亀井勝一郎氏の『言語生活に現われた現代文化』の一文ですが、そこで筆者は、萩原朔太郎の「漂泊者の歌」という詩を引用しながら、「朔太郎は詩論の中で次のように言ってる『大和言葉は極めて優美ではあるが、怒りとか悩みとか嫉妬とかの強い感情を表わす場合には弱過ぎる。大和言葉にはそういう感情を表わす要素が乏しいが、漢語を用いると、強くそれが出せる。』と」

いうふうに、漢語の持つ簡潔さと強さによって人間感情を強く表現することが出来ると述べている問題文ですが、そこに、李白の「餞別叔雲」と題する詩の末四句、

抽刀断水水更流

举杯消愁愁復愁

人生在世不称意

明朝散发弄扁舟

を添え、引用の「漂泊者の歌」との比較による設問になっている問題です。相当の読解力鑑賞力を必要とする設問なんです。入試問題も、マンネリ的な型を破って、段々こういう風に総合的な国語力の要求される傾向になったのでしよう。

鎌田 大学の入学試験のあり方ってことが、高校の漢文教育に大きく影響しますね。

古典教育・言語教育・人間教育

伊藤 鎌田先生の仰言った古典教育と言う視点で漢文を考えるということは、言ってみれば趣味的な意味でとか、古いイデオロギーを、ということではなくて、どう言ったらいいか、現代に生きてなきや古典じゃないわけですから、どういう形でそれを現代の人間、現代の若い人の中に生かすか、それがどうやったら、結び付いて行くかという……

大木 人間の本質に変わらないんですからね、そこに時間空間を越えた、普遍性って言うかね。それに触れさせないと……

伊藤 人間そのものが駄目になっていってしまうということが基本ということになりましょうかね。

大木 それでこのねえ、前回の座談会の中に、「国語が小中高一貫して全部言語教育になっている」という言い方がありましたね。そうして、「そこが年を取った人の気に入らないのですね。『何でも言語、言語と行って人間形成を忘れとる』という訳で……」っていうところですが、この点はうっかりすると自他ともに誤解を招きかねないところですね。今回改訂の指導要領でも「言語の教育としての立場をいっそう明確にする」という、改善の基本方針に添っているわけですし、今の国語教育で言うものは、確かにある意味での言語教育ですけど、だからと言って、言語教育一辺倒ということではない。言語を軽視したり、粗末にしたりして、例えば、文芸教育、内容教育の方向に傾斜することへの警告でしょうし、それどころか言語をぬきにして、真の文芸教育も内容教育もあり得ないわけですから、「言語の教育としての立場」ということは、その意味でこそ正しいことになりましょう。それをうっかり、「小・中・高を一貫して全部言語教育になっている……」と片づけると、それでは一体古文・漢文といった古典の教育はどういう在り方になるというのだろうか。国語科の一環としての漢文は、国語の読解力や表現力を養う上に必要であり、その意味での言語学習であると規定してしまつたら、それこそ単なる実用的、生活技術的効用だけのものになりはしないだろうか。いずれにしても、古典教育・言語教育・人間教育と、軽々に対置させると問題が出て来るでしょうね。戦時中の様な意味での偏狭な倫理教育や思想教育であつてはもろんならないけど、文学としての古典の、ものの見方、感じ方、考え方といった面においての

形成力というものは見のがせないと思いますよ。だから一時期、偏狭なナシヨナリズムにも利用されてしまつたわけでしょうが……。養あづかに懲りて、戦後の国語教育は必要以上に人間形成というところばを避けているのが実情ですね。それに、文学は本来、各種の論説、評論などとともに、言語文化の一環なのですから、その意味での言語教育というなら、自明のことでしょう。

鎌田 だから言語教育というのね、戦後における言語教育というものと、今のここで言う言語教育というものの内容は相当変わつて来ていると思いますから、貴方の言うように、やっぱり作品の本質に迫っていく、そうあるべきで、言葉だけというような言語、或いは生活言語とか、そういうのは非常に軽薄だと思ふ。やっぱり人間の内面に入つて行く、本質を掴まえて行く。そういう意味での人間教育ですね、そこまで行かなくちゃならんと……

伊藤 今の大木先生の御指摘は多分、最初の座談会の時の誰かの御発言だと思ひますが、あの時の全体の文脈から言えば、あそこで言われた「言語教育」というのは、戦前的イデオロギーや封建的人間観に結びついた「人間形成」を否定すると同時に、単に技術的あるいは機能的な意味での「言語」のとらえ方にも反対する、いわば、今もお話に出たような「人間教育」としての「言語教育」という意味だったことは、前後をみて頂けばご了承頂けると思ひます。教育が人間形成だということはいわば当り前なので、問題はこういう方向の人間形成をするかである。その点から言えば文学教育だけでなく、むしろ科学教育こそが人間形成でなければならぬ。近代科学の「結果」ばかり教えて、それを産み

出した人間の主体的な自由な「精神」を学ばなかった所に日本近代の最大の悲劇があったのではないかなどということを私も申しましたが、あの時ご出席の方たちも漢文教育は言語教育だと言う時、大雑把には、そういう「人間教育としての言語教育」と点では、ほぼ一致していたと思うんです。人間は言葉で意思伝達の手段にするだけではない。そもそも言葉で物を考えているんだからそういう文化の基礎としての言葉をもっと大事にしなけりゃいかん、と言う……。

月洞 僕は一寸ねえ、おかしいと思うんだけど、漢文はねえ、漢文なんだと思うの。それをね、漢文は道徳であるとか、或いは言語であるとか色々何かこういう風にね、はっきり言えは文部省式に分けようとするから、難しくなる。漢文は漢文でね、ま、他所ではどういう風にやってもいいけど、我々漢文やってる者はねえ、そういう意識でいいと思うんだけどね。だから、これ何のためにやってるのかっていうことはね、漢文やってるんだ、どうですかそれは……。 (笑) 私はそう考える。

ギリシア語とは、ラテン語とはと、喩えますけどねえ、喩えられるような性質じゃないんじゃないの、漢文と言うのは。何か、特別なものだと思うんだけどなあ。

伊藤 何か言語教育って言う言葉の定義なり理解なりが色々あって混乱があるようですが、あの場合には皆さん文学教育と対立させて言語教育という風に言っているのではない。科学教育と理性、文学教育と感性、道徳教育と徳目乃至はイデオロギーといった分裂のある中で、広い意味で国語教育をそのいすれにも限定せ

ず「言語教育」と呼ぶのは一つの立場、つまり「文化」の立場だと僕は理解しています。

加賀 だから言語教育で言うのは、言語のテクニク、技術のようなそういう捉え方をするのは間違いだ。言語、言葉による、考え方、感じ方と言うものが、それが本当の意味の言葉による教育で、そこに、その倫理性とか、文学性とかみんな入って来ると思うんですけどね。だから、その時に、私は漢語ないしは漢語を舍んだ漢文の持つ簡潔さと、含蓄性と言うか、これはもうやっぱり他所にはないものだと思うです。しかもそれは日本人の長い言語生活の血液になってるものだ。正しくこれを受け継いで、そしてそれはまた、さらに後に保ち伝えるべき所のものだと思う。そういう意味に於て私は古典教育の重視ということを言いたいんです。つまり、ただ単なる過去のもので、古いものは大事にしなきゃいけないというじゃなくて、そういう風に血肉となって来た所の言葉、そしてそれによって考えて来た思考なり感動なり、それをやはりそのまま、我もそれを受け継いでしかも伝えて行くべきもの、それが私は、古典だし漢語だしまた漢文だと、そういう考え方なんだけどもね。

読み物・教養語・読書指導

鎌田 あのねえ、漢文なら漢文の教育とか教養ってものを一般に高めようとするならば高等学校の授業内容ももちろんですけども、生涯教育という意味に於て、高等学校の生徒、或いは一般に、興味深く読まれるような漢文の読み物ね、これをどんどん出す必要があるんじゃないか。高等学校の生徒に読書指導というの

をやるでしょう。ところがその漢文なら漢文についてはあんまり難しく取り付く島もないような風な、あれでは駄目なんだな。やっぱり高等学校の生徒にも親しまれるような、そういう砕いた判り易いものがあつた方がいいんじゃないか。そういう意味において国文よりも少ないんじゃないか、漢文の方が。そこが非常に大事だと思ふんです、僕は。

松村 はい、それはありますね。うちの子は高校一年ですけれどもね、あの『十八史略』なんか、陳舜臣さんのだつたら読むんです。

鎌田 ああ、ああいうの面白い。あれだよ。あの種類なんだ。月洞 いや、先生方もね、やっぱり研究会でね、『古文真宝』あたりやつたらどうかと思う。『文選』が学問で、『古文真宝』は学問でない、『史記』は学問で、『十八史略』は学問でないっていうような考え方はやめて、我々江戸時代の日本人は『十八史略』とか『古文真宝』で育つて来たんだから、そういう研究会をやつた方がいい。

大木 ちょうど「漢楚の興亡」やつていた時に、例の司馬遼太郎の『項羽と劉邦』を紹介したら直ぐ読んだですよ。ところで、その感想が面白いんだ。「先生、どんな作家でも、原文には敵いませんね。」と……。「虞や虞や若を奈何せん」とかその他いくつかの箇所を引き合ひにして、「こういう所は翻訳したら、もう死んでしまいますよ。」と言うんですね。こういう発見というのは素晴らしいですよ。

松村 それで私の所が今度高校二年になるんですけども、どち

らかつて、英語が好きで漢文には興味を持たなかったんですよ。所が私が陳さんの『十八史略』なんか借してやつて放つておいたら読んだんですね。それから「これ面白い、そういうえは教科書に出てたけど、お父さんこれの原文ある？」「その書庫に並んでるじゃないか。」と言うと引っぱり出して見る。そういうきっかけが要る。ただそれが主流には一寸ならないと思ふですけどね。

月洞 でもねえ、やっぱり感覚を変えなくちゃいけない。山本七平さんの『論語の読み方』って言うのが、えらく売れてるらしいが、あんな難しいの、ちつとも面白くないんだ、私なんか読んでもね。

鎌田 あつそうですか、僕は読んでないけど。

月洞 ちつとも面白くないです。非常に難しい。それが、えらく売れてるらしい。

大木 しかしやっぱりね、あの人なりの人生の解釈というものがある。そういう点で非常に魅力がある。ちつとも常識と違ふんですけれどね。そこが多様な価値観時代の魅力なんじゃないですか。

月洞 いや、漢文の専門にとつてはちつとも面白くない。彼自身も整理しただけだつて言っているんだけど。

大木 そこがね、専門家っていうのはねえ、ある意味では専門馬鹿つてことですよ。

月洞 そうだ、考え直さなきゃいけないな。

大木 やっぱり広い視野で物を見ていくつていう……。

鎌田 そうでしょうね。

加賀 昔はあの、ほら下村湖人の『論語物語』。あれは寧ろ若い時、というより小さい時に、「面白いと思つた」。

伊藤 武者小路さんの論語も結構面白いですね。

加賀 『論語私観』ね。

大木 有名な話がありますね。亡くなった高橋和巳が学生時代『論語』を下宿の壁にぶつけて「こんなもの！」というんでばらにしてしまった。その彼がついに『論語』に取り憑かれてしまったのは何かって言うと、中島敦の『弟子』。あれを読んでからだという。自分のその捉え方の間違いつてものに気が付いた。それからもう『論語』一辺倒になったと述懐してますね。そういう変わり方。そこに何か漢文教育問題解決への一つのヒントがあるような気がしてならないのです。若者はみな高橋和巳のミニ版なのですから。

鎌田 教師側でね。

大木 それを十年一日の、無味乾燥な読解じゃ、嫌われちゃいます。

松村 で、私なんか三年で今、選択を持っていて、例えば、最初の一か月ぐらい史記の句読点も何もないのを、いきなり出してとにかくどこで文章が切れるか切ってみろということをやります、その日は必ず辞書持って来させて。最初は二時間連続の授業で四行行か三行行かですが、漢字が並んでいけば、表意文字なのだから、どれが名詞になってどれが動詞になるかぐらいは判るだろう。字の働きのですね。そう言ってやって行くと、漢字に対する抵抗感というものが多少薄れますから、それを取り扱

うというために、辞書に親しませたいので、やるんですけどね。そして夏休みの課題に必ず、中島敦の『季陵』か、出来たら武田泰淳さんの『史記の世界』の感想文を五枚書いて出せと。但し列伝だけでもいいし、一番最初の本紀の「司馬遷は生き恥を晒した男である。」という部分、そこから五頁でも十頁でもいいから読んで感じたものを書いて来いということをする、卒業して二、三年してから面白かったという事言いますね。

加賀 あんただからいいけども、全部の漢文の先生に皆それやられて言っても一寸無理だろうけれど。それはさて置いてね。今の例えば武田泰淳だとか中島敦だとかを夏休みにさせるとするのは非常にいいと思うんですけど、その本は皆持つてるんですか。

松村 文庫本で買わせます。三、四百円ですから。

加賀 それ、生徒たちは抵抗感しない？

松村 いや、「選択」を取った者ですから。

加賀 今陳舜臣さんの話が出たからなんだけど『中国の歴史』っていうのは、本当に私は驚嘆しているんだけどね。あれなんかも、本当に高校生あたりに読ませたいし読める、それこそ文庫本になるといいが、それでもしかし皆に買えっていうわけにはいかないから、図書館の整備っていう風なことを考えたいんだけどね。

鎌田 そういうものは図書館で沢山買っておいでもいいんです。安いんだからねえ。

横の広がり・他教科との連関の重要性

月洞 今僕はね、倫社の先生と話し合ったりしているんです

が、倫社では例えば『論語』を夏休みに全部読ませるといったことをやらせているんですね。

松村 私の学校でもやらせてます。

大木 横の関連が非常に大事ですね。

鎌田 倫社では扱いますからね。

加賀 そう言えば、思想の関係なんか全くそうだね。

月洞 倫社で、あんな百科辞典みたいなことは、やったって子供には無理だつて。それで夏休みに『論語』なら『論語』読ませて、それについて感想を書かせるつてことは、大変意義があると言うんですね。

大木 いつかのほら、公開授業で、中学二年生に論語を学習させた。例の葉公が正直者の直躬を持ち出した話の教材でしたが、これを同僚の倫社の先生に見せたところ、「こりゃ面白い」というんですよ。

鎌田 「父は子の為に隠し、子は父の為に隠す。直きこと其の中に在り。」の話だな。

大木 あれがね、現在の六法全書の、刑法の中にそのまま生きてるといいます。

鎌田 そりゃそうです。貴方うまくあつた。

大木 親族の不利になる事件のためには、我々は、証人台に立つことを拒否する権利があるんです。「こりゃ面白い。」つて、「俺一つ、授業のネタにする。」と。いやあ僕は僕でもって『論語』の指導にこれを取り入れるつていうんで、やってみたら非常に面白い授業展開になりましたよ。刑事訴訟法の中に今も厳然と

生きているなんて、ついぞ知らなかったのですが……。おかげで、儒教というものの本質にまで持ちこむことが出来ましたよ。

鎌田 あれなどはいいい教材ですよねえ。もう古典の現代性つていうのはねえ。現代的に。

大木 そういう意味で、あの、教材研究つていうかね、これやっぱり専門畑だけで頭を寄せ合つていても、案外限界に来てると思うんですよ。受ける相手は一般教養として期待しているわけですから、教材研究も、専門の一筋道だけではなしに、やはり広い視野から吟味することが大事だと思いますよ。折角の教材が生かされないことになってしまう。それで、さっきも武田泰淳の話が出ましたけど、四、五年前でしたかね、学習院高校の三年生の研究授業を見せてもらいましたが、「渑池之会」の教材で、秦王と蘭相如との虚々実々のやり取りの際、秦王が威力をもって趙王に悉を鼓させてしまつと、途端に御史をして、「秦王与趙王会飲云々」と、その場の事実を記録させる。すると今度は蘭相如が、「五歩之内、相如請、得_レ以_二頸血_一大王_ノ矣。」と、おどして秦王に飯を撃たせるや、早速趙の御史を招き寄せて、同じくこの事実を書せしめたという。授業の指導者は、当時、こうして事実を記録に留めるといふことが、いかに重大なことであるかつてことをはつきりと生徒に強調された。それによって、生徒も我々も、非常な臨場感をもってこの会見の場面を読みとらされた記憶がありますよ。

鎌田 なるほどねえ。岡嶋君だな。

大木 で、それがね。武田泰淳氏の「司馬遷―史記の世界」に

もちろんと同じように述べられていますよねえ。「史官は記録官である。唯一の記録者である。彼が筆を取らねばこの世の記録は残らない。その代り書けば万代までも事実として残るのである。天に代わり人間を代表して記録するのであるから生易しい業ではない。」というね。中国のこうした時代に於ける「史官」というものの占めた立場、そしてまた、記録ににどめるといふことの重大さ。実はそれをぬぎにしては、あの会見の場の緊迫感は味わえないことになってしまふ。それと同じようなことですが、司馬遷が例の腐刑に処せられましたよね。あの腐刑の持つ意味っていうものが、普通は単に「生殖機能を殺ぐ刑罰」といった程度で通ってしまっているわけですが、実は中国に於ては「血を子孫に残す」ということ、そして「祖先を祭る」ってことが、孝道の第一義の問題なんですわ、したがって、腐刑ってやつは、それこそ人間存在の否定であって、当人にとってはこれ以上の屈辱はないことになる。司馬遷をして史記百三十巻の大業を成就せしめた原動力は、実にこの屈辱にあったと解説されています。で、そういう肝要な意味あいを書いた指導書は、残念ながら見たことがないですね。漢文の専門という点では精細を尽くしかけてきていますか……。こういうことはやっぱり歴史その他の専門畑からの知識をもらわないといつになっても期待できないでしょうね。

松村 私なんかよく感ずるんですけどね、やっぱり、あの、世界史教えてる先生達ねえ、日本史、それから倫社なんてね、その周辺のこう、周辺で言っちゃ語弊ありますけど、関連ある所と横に連携をとらないと駄目ですわ。

鎌田 それは、先ほど伊藤さんが言った「教材」って問題にもなってるんです。「教材の精選」というのは、どういう立場で精選するかが問題なので、例えば三種類に限定するなんていう、余り狭い立場を取らないで、本当に高校生、或いはこれからの国民の問題関心に堪え得るような内容を持ったものを、教材に選ぶという、そういう立場から広く考えなくちゃならんね。あんまり狭い考えでやると、これは駄目ですわ。そこに教材の問題があると思うんですよ。

教師の研究・学力・人格・情熱

鎌田 僕はこういうことを思うんですがね。元、付属におられた岩井先生の指導というのは素晴らしいと思った。教育実習で漢文の指導を受けたんだけど、この時間に、いったい何を重点に教えるってことを必ず考えていた。漠然とじゃ駄目なんです。内容の探究ですわ。それにはこの語句を掴まえるんだってことをはっきりさせて、そういう案を、どの時間にも必ず立てて授業に臨まなくちゃ駄目だって言うんです。満遍なくただ読んで訓話をやるのでは駄目だと。これは漢文の授業には特に大事じゃないかって感じがしますねえ。さつき大木さんも言ったことなだけども。そういう意味においてやっぱり教材の精選と教材の研究、それが非常に大事ですわ。

大木 そういった感動をもたらずに堪える、探究に値する教材ですわ。

鎌田 そうです、そうです、そういうことです。やっぱりそれをおろそかにして、そう言ったら悪いけれど、投げ遣りのな授業

も相当あるんじゃないかな。教える先生の方もあんまり、漢文に對して何って言うか、興味関心がなくて、しかたなくてやってくるのでは、こりゃ生徒は不幸だと思うんです。本当に不幸ですよ。

伊藤 私が現代中国に関心を持ったのは竹内好の『現代中国論』との出逢いがあったわけですが、広く中国のこと、とくに古典に関心を持った出発点というものは、今考えてみると、中学校の担任が漢文の先生で、高等師範を出てからまた京都大学の言語学科に行かれたとかで、変わり者の先生でしたが、大変力がおありになった。新潟県の方でした。いつもヨレヨレの背広に膝の抜けたズボン姿で、身なりは全く構われず、弁が立つわけでもなく「モグラさん」という渾名どおりまるで風采のあがらない静かな方だったけれども、誠実で、僕ら深く尊敬していた。軒の傾いた小さな家に居られたんですか、その御宅の到る処に線装本が山積みになっていました。そのほんとに貧乏臭いお部屋に、卒業した時、ご挨拶がしたくて、初めてうかがったんですが、その時、例の「日に三たび省みる」という句を引いて、人生には不断の反省が一番大切ですよ、いわばそれを僕の人生への餞けの言葉として下さった。この時の様子は今も忘れられませんね。それから、私は作文が得意で、よくいい点をもらったのですが、ある時職員室に呼ばれまして、君の今度の作文は仲々よかったが、「文章には論と駁があります。」と……。

加賀 「ばく」？ ああ、論駁、反駁の駁ね。

伊藤 ええ、それで「駁の文章は、そうめったに書いてはいけません。」と叱られたんです。昔から、なんかそういう文章書い

たらしんですね、私は（笑）。それで叱られたんですが、叱られたという印象じゃなくて、そういうことを先生が仰言って、その先生に對する何て言うんでしょうか、やっぱり人格的な傾倒と云うんでしょうか、そういうことが私にとって出発点に成っているという気がします。その先生が特に、所謂道徳教育だか人間教育をやって下さったっていう訳じゃない。寧ろその先生の漢文の実力みたいなものに僕等は惹かれたわけです。嘘を教えられなかったという……。戦争中ですから漢文使って精神教育しようとして下さっていた先生もおられたわけですけども、その先生の学力の浅薄さっていうのは中学生でも判るんですね。質問をしたら実力なかったり、不誠実だったり……。ですから何て言うんでしょうね、特別に教わったつもりもないんですけども、例えば、その先生が、朝々とそれこそ「音読」して下さった「垓下の罍」とかいようなものは、その時覚え、今に到るまで諳んじているんですね。

鎌田 その、人格っていうか、そこまで行かなくてもねえ、とにかく漢文の授業が面白かったということがね、その先生によつて「ああ、面白いもんだな」っていう、それをね、今の人格に感銘したとか、そういう風になるかどうかはあるけどもね、しかし少なくともそれは後ろにその先生の深い造詣があったからなんだね。結局それがあつてはじめて漢文の授業っていうのが面白い。漢文っていうのは面白いもんだ、ということになる。これがねえ、結局一番大事なことなんだね。私もそれに会ったからね、自然にそうなっちゃった。どうして、自分が漢文の世界なんかに来た

かと考えると、結局それは師範学校の先生だったんだね。そう、一年の時、あの渡辺先生ですか……。

月洞 いや僕などは、満州に就職して一月しか教えていないんだけど、引き揚げて来た学生が皆、「先生は『姑蘇城外寒山寺』というのを、泣きながら教えた。」って言うんだね。あれを泣きながら教える筈ないよな、常識から考えたって(笑)。そういう伝説が出来ちゃってるわけだよ。だからやっぱり一生懸命やったんじゃないかと思うんだ。

加賀 それですよ。結局さっきの情熱ですね。

鎌田 だから、これからの問題は、やっぱり漢文の立派な先生の養成ですね。

加賀 いや、結局それなんですよな。

鎌田 そこにつきますよ。

おわりに

伊藤 時間も過ぎましたので、最後に、先生方から一言ずつ、やや大所高所からとでも申しましょうか、根本的に考えて、今後、漢文教育というものは、一体どういう方向をめざしていくべきか、といったことについてまとめのご発言を頂ければと存じますか……。

大木 今のねえ、仰言ったことを、桑原武夫さんがね、そっくりなこと言ってるんです。「古典の、学校教育ないし一般的な普及を望むならば、専門的知識と現実感覚を持つ優れた教師の養成がなによりも大切である。」とこう言ってるですよ。続いて「古典の価値は、その方法さえよろしきを得れば必ずや發揮するもの

である。」と、絶対に間違いなく価値があるんですね、これね。

鎌田 もうそれに尽きるよ。

大木 まあ、これ専門外の桑原さんの言うことなるが故に一層ね、やっぱり我々としてはきちんと聞いていいと思うんですね。やっぱり教師ですよ。

伊藤 どうも生徒の問題じゃなくて、我々の問題だということ……(笑)。

加賀 いや、結局、漢文、漢文と言っているけれども、今漢文は位置付けとして国語の古典の中に位置付けられている。これは私は非常に正しいと思う。と言うことは、やはり意識として常に持つべきことは、言葉による、言語といってもいいんだけれど、それによって物を考え、感じていくところの言葉というもの、また、言葉によって考えまた感じるということ、それが先程言ったように、日本あるいは日本人の魂——文化、精神といってもいいんだけれども——その全部ひっくるめてその根本をなしている。そしてそれはやはり漢語漢文の持つ所の簡潔性と含蓄性によって培われた所の文化でもある。それは、日本人が形成し且つ伝えて来たものだ。これは正しく継承しまた正しく伝えて行かなければいけないものだ。そのためには、どうしてもそういう意味においては、漢文教育というものは絶対に失ってはいけないものだ。日本の今の精神と文化の継承と発展のためにそうだと私は考える。そこでそのために、私は、国語畑の人でも、皆そのね、漢文漢語というものについては、自分のこととして一つ考えて意識してやってもらわなきゃいけないんだ、それを抜きにすれば日本の文化

というものが一つ片手落ちになってしまふのだということを書ね、この際一つ是非言っておきたい。具体的なこととしては、さきほどから何度も言ったようにね、音の重視を強調したいというのが、私の主張なんです。

伊藤 月洞先生。

月洞 私からすれば、若い人はもっと勉強しなきゃいけない、いけないと我々老人は考えたり言ったりするけれども、若い人はそれなりに勉強してやっているとあってねえ、その辺のことを考えないで、年寄りの考えで物を言っているだけじゃいけないので、まあ反駁されれば反駁されてもしようがないんだってという風に考えてるわけだな。老人があんなこと言ったってしようがないじゃないかって言われれば、ああ、そりゃそうだなっていう気になつて来たねこの頃。(笑)

伊藤 最後に大木先生と鎌田先生に一言ずつ御発言頂いて、締め括りたいと思います。

大木 僕は、さっきからの鑑賞を指摘すつていうことをですすね、浅薄に捉えないでほしいってことですすね。作品の本質を掴んだ上で、その本質的価値を生かさんかのための語句指導でもあるし、句型指導でもなければならぬというわけです。本来、文学作品の鑑賞って、そういうものだと思うんですけどね。主題と言うか、とにかく作品の中心になることを掴まえて、それらとの結び付きにおいて、部分というものは生かされるわけですからね。

伊藤 教師による主題の把握がまず先だと……。

大木 だからたとえば「漢楚の興亡」の指導一つにしても、ど

んなに綿密に一語一句をですよ、訓詁的に処理してもですすね、あの項羽、最後の場面にですすね、項羽が「笑ひて曰く」というね、あの「笑ひ」を本当に玩味出来なかつたらですすね、玩味させる様な指導でなかつたならば、それは問題があると思うんです。それまで「怒りて曰く、怒りて曰く」と来ていた項羽が、最後に「笑ひて曰く」という、あの最後の笑ひは非常な意味を持っていて、そしてまた、それが解つて初めて、項羽の憎悪というものが、掴み取れるんだし、また史官司馬遷のその意図も判ることになるんだし……。実はそういう意味での鑑賞を目標した指導であつてはじめて、漢文の授業も面白く展開されるのではないでしようか。

伊藤 鎌田先生一言。

鎌田 いや、もう、申し上げることないんですけれども、これやっぱり、漢文古典というものの、日本文化における、その位置と云うか、意義というもののね、それと、それから、古典の、漢文古典の現代的意義ですすね、そういうものに対する、正当な自覚、自信、情熱を持って教えるということが一番大事じゃないかということ、やはり、自分から自ら侮つて臨んでは、もう到底その成果を上げることが出来ないということ、そういうことをお話ししておきます。

伊藤 有難う御座いました。